

ふるさと吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。

そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。

そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。



第18回 みんなに届く実り その道のり

実りの秋

収穫の季節がやって来ました。おいしい新米が食卓に登場する頃でしょうか。普段から口に入っているお米ですが、この吉富町では、どのようにして稲作の基盤が形作られてきたのでしょうか。

度重なる早魃・害虫被害を乗り越えて

長期間雨が降らないことで土壌が乾ききり、農作物などに被害を及ぼす「早魃」^{かんぱつ}ですが、「早」は日照りで長期間雨が降らないこと、「魃」^{かん}は日照りの神を表します。早魃は昔からきりがなくらい発生しており、それだけで吉富町の災害史を埋め尽くすほどなのです。

明治37年の夏には50日間の日照り続きにより出穂せぬ水田が多く、やむなく軍馬の飼料として稲を納入しています。また、昭和9年は空梅雨に悩まされ、何とか植え付けをした稲も枯死してしまうような状況の中、揚水設備を使ってやっとのことで田植えを終えたにもかかわらず、今度は害虫が大発生する事態に見舞われ、多くの米農家が収穫ゼロ・減収の憂き目を見ることになったのです。



大正4年の水利事業

大正の初年も不作・凶作続きでした。当時、別府・楡生・鈴熊・土屋・直江・今吉・和井田地区の人々はいつも早魃の被害に苦しみ、転出を考えるほど切羽詰っていたそうです。

そこで矢頭軍司、賀部秀二(当時の村長)、太田忠右衛門らの代表が先進地を視察し、山国川から揚水するという恒久対策をとることになりました。発動機2台を山国川畔と篠塚の北(今吉)に据え、別府には小型発動機を据えるとともに、川畔に繋がる水路を開いて通水しました。この対策により、上記地域は被害から免れることができたのです。

これ以降も早魃の年は十数回に及び、特に昭和14年の大早魃は西日本に甚大な被害をもたらしたのですが、この水利事業のおかげで吉富地区が被害を受けることはありませんでした。このことに感謝し、昭和15年には篠塚の北(今吉)に「揚水記念碑」が建てられています。

毎日のお米のために

その後も稲作環境の整備は続きます。昭和41年には全町を一円とした土地改良事業(揚水施設・水路の開設)を実施し、平成2年には土屋・鈴熊地区のは場整備事業を完了しました。現在は、界木地区のは場整備を進めており、担い手育成のための研修会や農業振興補助金による支援も行っています。

数々の困難をくぐり抜けて築き上げてきた米作りの歴史に思いを馳せると、私たちの食卓に届けられる恵みは、決して当たり前なものではないことが分かります。これから、その土壌を守り続けていきたいものですね。